

# 人間工学に基づいた危険が伝わるデザイン 及び注意表示のガイドラインづくり

(株)ベネッセコーポレーション

## プロジェクトの目的

保護者(年長の児童も)が安全上の重要な注意を容易に認識できる手法を、人間工学・心理学的な見地から解明する。長期的には、「エビデンスに基づいた注意デザイン」及び「注意表示ガイドライン」を作成し、自社基準のみならず、広く普及することを目指す。

## 結果

保護者は、注意表示を「当たり前のことばかり書いてあり」「読みにくい」ととらえ、必ずしも注目しているとは限らないことが、データとして初めて明らかになった。表示方法を目立つように変えても、保護者の想起レベルに変化は生じず、ふだん注意表示等に関心を持っているかどうか、想起と強く相関した。

玩具の対象年齢は「安全」よりも「知育」の指標として認識される傾向が強かった。

## 実施方法

玩具や子どもが日常的に触れる可能性のある製品の注意表示等に関する意識と行動を理解するため、まず、フォーカス・グループ・インタビューを実施した。その結果をもとに、乳幼児を持つ母親を対象にしたオンライン調査(711名回答)、及び、注意表示と玩具の対象年齢の表示方法による注目と記憶の違いをみる想起実験(32人参加)をデザインし、実施した。絵記号(例・下)の認知度についても検討した。



くちに  
いれない



まきつけ  
ない

## 今後の展望・展開

安全上の情報として、どのような表示方法、表示内容が最適かつ効果的かを検討していく必要がある。また、生活用品に関しては、表示を読めない子どもの代わりに、保護者が適切な行動をとるよう促し得る表示づくりが求められる。

注意を惹き、容易に理解できるという点では、効果的な絵記号の制作を一つの可能性として検討することが有効であろう。